

情報通信分野における研究開発について

2011年3月31日

ソフトバンクテレコム株式会社
専務取締役

弓削 哲也

1. 何のための研究開発か？

●イノベーションの創出？

- ・画期的な技術革新はビジネスや必要性だけの観点からは生まれていない
- ・ましてや、既存の技術の細部を批判することからは生まれない
- ・単なる知的的好奇心、「こんなものが欲しい」という単純な欲求が重要
- ・「競争に勝つため」というのでは、すでに目的のところで負けている

●ビジネスで勝つため？

- ・各企業が各々の経営判断でやるべき問題

例： 技術獲得における一つの方法(あるオペレータの場合)

- ・非常に早い段階で技術の芽に投資
- ・実用段階ではベンダー等、社外の力を最大限に活用

結果的に、

- －海外ベンダーの比率が高くなるケースもあり
- －初期の投資については失敗例も多数存在

(課題)「死の谷」を乗り越えるところにオペレータがどう関与するか？

2. レビューの必要性

検討にあたり、日本において「現状に問題がある」、「今後に懸念がある」という点では(残念ながら)関係者の見解が一致しているように思われる。

そうであれば、過去および現状の例についてレビューしてみることも必要ではないか。

●レビュー項目の例

- ・研究～実用化の経緯
- ・その中での官民等各プレイヤーの果たした役割等
- ・成功(もしくは失敗)のキーファクター
- ・日本の関わり方とその成否

●レビューする技術の例

- ・光ファイバ
- ・IP
- ・CDMA
- ・検索エンジン
- ・クラウド

3. テーマの決め方などについて

国家レベルで力を注ぐのであれば、「他にない技術を始めるにはどうするか？」という視点が重要ではないか。

- ・キャッチアップ型であれば各企業の経営判断で実施。高打率を狙う。
- ・創造型については国として実施。低打率でも可。

<注意すべきこと>

- ・「研究のための研究」とならないこと
(判別方法:「他でもやっている」、「他国に負ける」という理由づけ)
- ・NIH(Not Invented Here)を差別しないこと
- ・オープンかつコラボレーション重視(一社で全て開発するのは無理な時代)
- ・研究開発における「護送船団方式」を終焉させ、「死屍累々」を受容すること

4. 本委員会の進め方について

本委員会の進め方でよく分からない点、疑問に感じている点もあり、念のため列挙しておきたい。

(1) 本委員会は何を検討する場か？

- ① 研究開発のあり方
- ② テーマ選定のあり方
- ③ テーマそのもの

(2) 進め方について

本委員会の検討の目的がもし③なのであれば、テーマを広くサーチし、システムティックに候補を絞り込むことや、残った候補についてはさらに突っ込んで深く議論の必要があり、委員に一渡り発表させる方法では必ずしも十分ではないのではないか。

5. 災害対策と研究開発

資料を概ね準備したあとに東北地方太平洋沖地震が起きたので2点だけ追加でコメントしたいと思います。

(1) 発災当日、旧来の電話網(携帯電話含む)はほとんど使えなかったのに対し、E-Mail、Twitterなど従来識者から批判を浴びていたネット系的手段は概ね使えていて緊急通信的な役割も果たしていた事実についてよくレビューべきではないか。

(2) これを機に、耐災害性や災害対策を謳った研究テーマが沢山出て来るものと想定されるが、今までの例で見ればそういった便乗的なものはあまり役に立っていないように思われる。テーマ選択にあたっては内容等についてよく吟味する必要があると考える。

以上